



洋学文庫  
文庫8  
J304  
1





旅の日記

陸軍軍医總監石黒忠真

十月廿五日所用方之第一軍司令本部所在地を  
遺さすの辞令を受く

十月廿六日雨降る中旅装束を東福急下り

市街を抜けて出立す蓋昨の市前会議の  
時親しく御暇を中上げ候とも高一度市街不  
を抜けて出立すと特大本營西門より

し

官中より運輸通信部に打て、又至工兵中隊  
に別を告げ、杉中海軍大尉を送り、此小汽船にて  
遠江丸に上り、如長辻安次氏に遇ふ、此紀州の  
人昔年余も海老屯田兵を巡視せし、此氏は如  
頼りしとあり、を以て一見存あり、語らば須事工  
して郵船會社に品支取人恒川氏來話せ  
教時して長谷場紙孝相田正文氏來り、復  
可猪了即久保田朱俣諸氏送る、杉中大尉  
曰余は閣下を林洞海の家に知りし語り  
同大尉は舊知林洞海の家を弟ありしと知り

共十洞の旧事と談

遠江丸ハ市三軍十馬を、馬敵兵軍支を搭載し  
馬百餘頭輻手兵中尉某三等獸医中村某之  
を督一人支四百余名續々乗船、船中一時喧騒を  
午前十一時樺山属より電信を持來り、接手之を  
見、此ハ明義州の第一軍、一區却長石坂兵士  
武谷二等軍兵士より發し、九連城攻撃中、討  
ちて負傷者累次、之を運搬し、併せて九連城を占  
領せしと知り、即衣を卸し甲板より、遠江  
大本營に向ひて戦勝を奉告、午後三時

雨止むに舟を復航す

往年余巡遊を命せられ度船に乗る。友人千田貞  
俊氏廣島縣令に任せられて赴任意度せしと同  
時之氏真車馬之幅を飾りて元頭の大吏眼光  
炯々一日余も市中を歩きて余も軍服を装ひ氏ハ  
兵火常の修共千を推し歩を連ぬ市人怪しむ  
者多し。共大に笑ひ氏此地に令りてや寧ろ品港の  
干潮に降りて上陸に困難なるを憂ひ大に士本を  
起して遂に此良港を築告下りて時論に合はむ  
遂に大に喜ぶ所あり。今度此兵の奉りて

若此港ありせば大兵を迅速に動かす。秘密に兵  
を派遣し、糧食を初め軍用物を問敷く航  
送する。共此に能はざるへく氏の功績実大に云  
へ。帝も軍用のみならず此築港よく人ハ旅客の  
便抄何れ也。余は此出兵の最初に於て書を氏に  
せて此事を述べし。氏の強諫あり返書して曰生死  
苟も一回すも世人に有用と認めし。を得んハ實に  
幸之又代を頼みし。と私に全港を中めて殊に  
感を了らり記して後述す

今回同乗者貴族後議員山田卓介、二氏後



少将の遺物として少将刀を好む家十数刀を爲  
す又五十嵐氏の携する備前守光の太刀として  
刀身瀑布不劫の彫刻將致致なる諸氏金の  
藏をも不る人々を求む余曰帝國の軍帽軍靴  
以て欲を数歩の外に威伏をへ何ぞ寸鐵を要せ  
やと実ハ晨十東京へ來て町拳銃并刀を携し  
來り此皆失奈カ少壯者十懸け尽して今一を遺  
留せざるべし

談終りて甲板の上甲を以て這上後れて眩暈を  
入り是即吐洋丸の本船を止めて航路を以るべし

松室十入る茶を喫し寝し枕く

廿七日天明け松室微子明之甲板の上にて眺  
望せし干珠満珠の二嶋を舟前右舷に  
豊浦を入り因て思ふ陸軍に匠西坂井直  
常馬學子忠順の士に陸軍省之を歐洲に留  
學せしむ坂井独逸に留るる数年肺疾を  
罹り歸朝して郷里豊浦に歸り病床に在り  
六年終つ不帰の客とあり新入して今日  
高立し一六にて學子術才能余を輔け清書の  
事業果して是を以て詳かふらざるべし 皇太子

年浦田山の松井氏の齋居せし迄を牛女  
惆悵一眼暇為し温ふ船進み門司港入投  
錨り石炭を増積せしう為し留るゝ同來諸氏  
下の関子上陸を勸むる迄くまで曰川卯の夫  
染衣に逝く馬関に訪ふべき者あり故に行くと  
川卯の馬関の旅存して其妻波女頗る奇骨  
あり能く飲み能く談む往年余官用を以て  
九州に赴くと川卯と泊り翌朝の汽船を約せ  
羽衣を起きて衣を世に委ね舟に候つ余  
至らざりし汽船のこゝ登り海中に沈くを以て余

急て其妻を呼之を問ふ波女曰汽船今矣  
忽ち其家孫病あり先生十一診を乞ふと其  
故に故に疾を告きて先生の疾を緩ふ  
る而して烟を呼して平然と其人の為り以て推せ  
へし去年病を以て没せしと云て家ハ岸上へ入て  
其人ハ既亡矢長谷坊山田早川の津氏津上り  
て或は浴を以て或は柑子を焼きて常服せし船  
午前十一時より抜錨り山巖析るるを以て  
嶋の消毒所を以て蓋地消毒所ハ往年余の  
任る内務省に蓋し市長共任せし局長と討

畫せしめ此地外國より直航する船舶の来りし  
ところを以て特之を設け猛悪なる傳染病を  
して内地にうつるる防局をもつて要するを以てし  
抑海港に消毒所を設置して外より來る傳染  
病毒を防ぐに今も衛生制度上より於て最急  
要する一事なりしを列國中精密の装置を備へ  
完全なる場所を設て渡すの旅客を之より傳  
て不快の感を生せしめざるを始り稀に幸ありて  
我國百度皆奉りて降し精新の装置を以て  
長浦長崎相館神戸及び此馬関等此設

あり所以の事あり改米諸國に耻を不し一步改米  
に謀歩せざるまよと云へば故に我國民の此設を  
る為に幾多の傳染病の眞實を免るの幸福  
を許すやも算數を以て之を計らば其利益  
莫大ならず船舶の倉庫を以てし點々島嶼の間  
を縫うて漸く大洋に出入り所謂島々を以て其界  
洋に人船舶を以てし船舶の警伏を以てし漸  
く船舶を以てし益獲り点々島嶼に於て其日  
夕食を飲ん

廿八日曉起船窓より洋面を窺へば水平は







長谷場尾ハ山縣大将の標葉日記を以て誦せ  
盛慨淋漓の事多し人を感する詞甚多  
非を以て事變より定次の詞能く人を感  
せしむ置る故後長谷場氏自家の近詠を以  
て示さるる詠多し

三十日昨夜平風起り船高揚し船中  
船底に困り相食を缺き甲板より能く  
前上野より同乗諸氏船定より舟子大同江  
近づきしを報せ零呼して漢陽河に碇  
し船中より舟子大同江洋に碇し海の  
舟子

途に連山を度り山の一角旭旗を掲げ天幕を張る  
まあり少角を度りし僅し漕舟をみ見処に草屋数戸  
と天幕しるる是漢陽河の須臾にして短艇を下し  
船員に謝詞を述べ同乗の山田柏田作知地五上山風  
法氏に別れ舟長並に早川長谷場二氏と共に陸上  
を他の法氏ハ舟二軍に往くを以て此地に上りし  
に長谷場氏も舟二軍に行くものあり陸上  
近事を聴くと欲しく此地に上陸す

漢陽河を朝鮮國長連縣の一村より此地を距  
ること一里許の処に舟に漢陽河の枝村より五里

浦に福寺ありて人衆十餘にたり是は寒くして  
一漁村之朝鮮の俗村を洞と稱し海邊の山村を  
浦と云はれ日我海軍艦隊此地より於て上陸する  
奈見一尋て陸軍兵站部を置きしよりして  
兵站部設置以來未だ二十餘日たる所の海岸  
の新造波止場より上陸し岸上より三町許  
甘藷の假廠あり即兵站部之入り司令官歩  
兵少佐武田信賢氏副官砲兵中尉田中弘太  
郎氏と馬場武田氏の先年近海よりして清生  
隊演習の際数日間氏と演習を共に元知心

あるれ其の後氏伊予守和守と帰休し別後已に  
六七年より西兵の霜を増し一尺今昔の感と  
堪へし年を把て今回開戦に本連隊の祝意  
を陳へ天皇陛下下の御健康を報し五日未  
戦事と今までの労を謝し炉火を換し足を暖め  
此地の近況を聞けり抑兵站部の事務は定み繁  
多にして此地のゆき八日と積りて内地より積りたる糧  
食被後より諸種ハ物虽及い人員馬匹不足の途  
定み夥しきよりして此地より更に朝鮮平壤に向  
りまゝ朝鮮義州地方に向くるまゝ又清國

金州地方へ向ふも皆一度の城より集ふ今日も  
津面と土渡の汽船集り居り満潮村の汽船を  
以て積荷を陸揚せしむるに津面より吹く風  
烈し汽船の汽船を以て荷卸の舟を風ふくも  
潮波のさしに荷卸自由ならずかて加へて汽船  
の内國のまゝに小舟の汽船にて送る大なる天氣  
を八合せて舟航もまゝに舟に教極めて  
少く之を引く小汽船は僅に二つ故に荷卸容易  
あらざるを推知もへ一現に余を載せて上陸せし  
かゝる遠に丸のボートに四人の船手にて漕ぎしれども

夕方の風強きて漸く舟に帰るを待てる風吹  
ハ則ち波の荒き以て思ふへ一尋て成田司令官  
に向ひしに浦にゆく船の舟に舟を向ふ司令官  
曰わくは黒井海軍大尉之を審み同様に同  
へしと暫して黒井氏外を至り一禮してしに浦の  
の船を向ふ氏曰本日しに浦行の船ありと成田  
司令官側よりしに曰わくは閣下余の室に休息給  
へしと右方の室に定けり乃早川氏と舟に室に入ら  
一人の茶を礼して入来り各刺を乞ふまある陸軍三  
等軍医佐伯隆資氏よりしに亦平塚に赴くを為し船

を此地に待たし行幸し一井き衣の墓塚を拂い更し  
司令部の近衛を直迄に此地海に濱せし小丘にて  
小丘四足を海より一溝を前溝中溝内溝の三小  
別を前溝と中溝と間十一の小岩山南海面と数  
立し其上に國旗を掲げ二個の天幕を設け是井  
海軍大尉之十居り海軍信号士二人を置きし松  
柏十信号を示し中溝に濱せし小丘に菅屋敷戸天  
幕二張新設の倉庫あり兵站司令部炊場郵便  
部倉庫官人吏の屋等此地に立し之を近<sup>徑</sup>を歩  
し小丘を起し内溝に立し人も多し前より美ら者あり

漸く近きし尺の陸軍技師工學士磯大吉氏の氏  
近眼余の此地に立ちて知れし久し遠く世にても余乃  
十肩を拍ちて敵居し呼ぶ氏怒りて應じ握り其  
人より其の比に病後を設置せしもの計畫を詰し  
今頃閣下の着せられんことを計りて迎へ赴くこと乃  
手を推りて山徑を長く人戸を三韓人群集を韓人  
近村より取りて物を強奪く之其不の雞印鉛餅等  
之印ハ稲葉として衣をとりて中邦に去るるれ大雞ハ  
本を投め及して作りき米俵の綱を及てかぐり恰も  
頼光山入りの夏及の物ももの中と数羽を入れ夏也

之を愛する人皆白衣黒帽儼然として冠帽一人は  
扱装の書信を嘆せしむ

因に云韓人の帽即冠ハ一見以て其未だ冠被せし  
者ハ既冠被せし者ハ表に居る者として區別せし  
衣被は是れ其全國一様にして何れも下苦の人と  
しや裸被は是れ是れ者あり此冠帽に付て考古  
史的の設ありや茲に述へし

卯二十個として中邦通貨凡十五銭雞ハ凡二十銭豚  
ハ三回五十銭ハ牛ハ三回之而して近口縣令の令に  
よしてイヤハ十銭銀貨を受れや物を買ふハ紳

錢ちらさハ自由ありし此処を過ぎ田間の十徑を經  
て一天幕あり大倉組の居を以て工作人夫を督  
而之大倉組の中間俊平氏ハ工學士中漢西一郎氏  
之十居ハ皆知人之小丘を造り山陽稍平なる処に  
人夫數人土を掘り屋を葺き假廠を修り是病疫  
之流行し彼は土地を譲り送りて小堤上のヤ路を  
一溪流に沿うて水溜りを定め軍艦を運り陸上  
の炊事ハ日必要あり知るハや素より井あり溪流ハ亦  
少くして湯故ハ融氏此処に陸海の用に依りて各水  
道を作人として余に詢し余大に其奉を賛して曰此





そ安志を祝し病院地の天幕内上居らむ中山の大學  
を卒業し京都官病院長とて軍人十部も今此荒原の地  
十部大幕の中住せむ其苦特々想ふ一し此れ一行  
厭ふもさう得てして天幕に入るは萬志致きまきこ  
十月三十一日曇風朝四十七度早起徒卒を呼んで嗽水を  
取らむ僕報して曰今已に三人の嗽客あり之を終らむハ  
能ハと乃びて之を尺八の司令部の前面に松幹二個を  
構へ梅干の空樽に水を盛り牛肉雜詰の空樽を杓と  
して使葉のハ盤一個ありて三人順次之を以て盥嗽せり  
余代客の盥嗽を終るを待てして側側へ上る厠の屋後

の山角に設け庭を垂れて壁しをせり之に上りハ海風凜  
烈として恰も聲を裂くや厠を以て使嗽場と云ハハ  
尚數名ハ盥嗽ありり余も入りて他客讓りて余ハ  
盥嗽せむ嗽を終りて室へ歸り武田早川女氏ハ燈を囲ひ  
粥食を喫み米飯と菜漬を副わのめ武田氏囊中より  
雞卵數個をとりて余等二人ハ食す  
既にして遊技師来て曰今朝人を近村に遊せ牛一頭を  
焼ハハ便十三回来た三日天朝長節に降一取二人丈と  
共ハ祝酒を奉る時の肴と云きしと云し余曰ハ此れ  
信じて三日十五ハ余も亦一席肉を願ひ人としを

とふしひしを推して復病没地十五町近郊を連歩！  
墓地を撫定し蓋地地多人表輻(巻)とふしひの  
民者ありとせしむる一民者ありの通る墓地を  
要中八の午時司令部より帰して午食を蕪苗  
と雞肉の煮付あり鼓舌して是を賞味し蓋  
司令官の特余の爲よと申す田の雞を割き  
一之食後暫時して戸を閉し外者あり即  
一等藥劑官大井玄洞氏の禮て曰本日  
錦川及び平壤より今日上陸せるもの池  
軍医正も亦同ふりて来るに波荒れて船

病甚く爲り上陸せるの事力なく是の官を  
閣下の安否を祝し且航便を求むと大井氏  
ハ六月の初より従軍して仁川より藥物供給の  
事を擔任日夜戦事全力平壤の役より  
薬品に代價生材料が供給の爲に氏の扱より  
まの今も馬の情餘あり語咽りし西眼涙  
を流し炬火は六月の末より終りし  
三時より俄に戸を排し入る者あり即一等軍医  
正池正直氏の座に入り曰病甚く殆ど立  
能はざる也陸上閣下の事を思はば中より



きよき丸いも早川氏とせし新く炉に火を盛置し  
三氏と暖を取れり咖啡を行李中より調ねて飲  
温をわたり久しきも主客五人にて椀僅三個一人飲  
みし又二人飲む里井氏曰此味実し忘れ難し且  
窓下の親く調理も不味し味の厚きを是れ余  
曰君甘言で高一椀を重んずんて飲まざる乎と氏  
笑て曰実し然し直又一椀を喫せり喫し終り皆  
曰此温未し去らざる及んで早く睡眠を就くも人の  
又更しききも是れ戸外忽し声あり田中氏應へ  
曰何ぞと曰く人丈長二人丈海濱の揚陸し役事し

終り各々屋に帰るべしと寒くして眠るに能はも  
希くハ司令部の金を借用し湯を飲して喫せり以て  
温を取んとし折時金を貸さぬ人とも頼りて田  
中氏曰明朝の炊飯は差支ふらば六之を貸へと  
人丈長曰敬謝も直し金を借して去り以て此  
地の不自由を推察せし

寝入り寝所六土間に草を敷き上し朝鮮席を展る  
のみ軍後の上寝衣を志し携りたるの毛布を掛帽を  
冠し以て早川氏之を笑ふ暫くして四壁の板同なり  
二方ハ板を以て壁と換へ二方ハ草を以て壁と換へて

して多尺侵入一頭冷し襟より早川氏も亦帽を冠し臥せ  
或田氏壁を隔て語りて曰昔屋根の間より仰き及れ八星  
煌々幸し明日も亦快晴ふらん余曰晴は此長之きもんら  
一雨来りハ何れ之を避けんらん早川氏曰炊場の天幕中  
に避けて可あらん也と淡笑してつらきも眠る夢らし  
因に記き石黒長官の談に曰世人の軍事の戦域を詳  
しせむして漫に駭評を下すハ実と困る兵站の事就  
て云ハ大本営の由り兵站總監部ありて其内より又種  
々の課ありて之ハ糧食の事より詳細をえり一軍の糧  
食を送るハ其數を兵站總監に録せし監督長官之を定め  
て糧食の品港に集りて中品港より漢陽河に送り漢陽河  
より陸路を以て為幸を海路を以てハクイ浦迄送りてハ之  
を大本営の兵站總監部に属せし運輸通信長官と漢陽  
河の兵站官とを任を負て平壤よりハクイ浦まで送り其先  
ハ一軍の区域より一軍の兵站監を受けて先く送り  
故に此送り力と量とを計算し一軍の作戰も亦此区域  
を詳しし初めて各兵站の事を解すべし

十月一日晴朝本風あり海面平なり砥の如朝飯後  
辻長谷場柏田山田の諸氏遠江丸より至る之を導きて  
共近郊諸氏を散歩し一民家より一怪人あり厨房

と云キ、処に食具の陳列せしむるを、磁器銅器共古を  
愛せしむるを、其の内を、人の裁縫する者あり、縫き  
て、肩を向て、余軍の兵を、辟く、我軍も亦、早に戸  
を開て、去人とも、此の屋後の春屋に、一夫夫、来りて、大声  
叱咤せし、何の語、を解する、こと、能はし、色も、厲声、怒  
色、に、我軍を、叱する、もの、あり、を、知、蓋、朝鮮の俗、婦人家  
を、り、決て、他人と、接する、こと、許さず、他人も、亦、戸を、開きて  
屋内を、入る、こと、を、為さず、を、以て、之、多、此、處を、去て、帰、連、に  
就、く、連、中、馬、豚を、縛、て、畜、する、者、あり、此、上、文字を、畫、て  
其、便を、問、へ、答、へ、て、曰、十二、兩、と、十、高、便、を、と、一、高、を、額、に、手

し、去る、行く、と、町、余、是、以、官、某、馬、の、此、事、を、談、を、談、官  
曰、此、十二、兩、の、朝鮮の、兩、十、十二、兩、我、兵、二、山、十、錢、と、ある、と  
此、に、於て、諸、兵、と、せ、し、此、豚を、屠、りて、食、する、こと、を、令、て、復、前  
に、去、れ、人、吏、已、に、購、て、去、る、皆、大、に、失、甲、を、司、令、部、に、歸  
諸、兵、と、別、れ、午、飯、を、喫、し、山、南、に、あり、て、多、麻、子、丸、の、本、を、得  
て、其、本、に、來、ら、も、霜、色、滿、山、諸、兵、を、於、紅、葉、を、殘、し、檢、本  
邦、土、月、下旬、の、町、近、日、韓、人、群、を、令、て、此、地、に、來、り、て、邦、人  
并、漢、服、を、見、物、する、者、陸、徒、復、へ、も、檢、も、我國、四十  
餘、年、前、相、州、に、田、に、初、め、て、西洋、服、の、渡、來、せ、り、其、の  
如、き、に、午後、五、時、并、海、軍、大、尉、鶴、一、羽、を、令、て、歸、る

事して曰余の巧妙の予此名鳥を射得たり幸に珍容  
石黒閣下の鳥あり是を天長節に之を調記せし  
祝盃を奉人として之を壁上に吊きて斬りて海面流  
笛の声あり扱して曰多摩川凡仁川に流るる黒井氏  
曰多摩川凡仁川に明日は閣下此處を祭せらば天  
長節にハハハ一鶴を得へりといはるる今夕之を屠り  
閣下ハ其皮ハハハ乃炊て之を命じて之を調記せし  
大根を和して之を臑汁に煮り人を各幕に設けて曰く  
今夕鶴の臑あり各幕に食ひて宴時あり皆集り来り  
り者武田田中黒井共其利能石川の諸氏に余早川

氏と共に炉を囲み鍋を炉中に吊り酒を暖めし食ひ  
且飲む余天長節に際し祝盃を奉人として三鞭酒一  
折を推し来り行本にせし是れ於て其中より二本を  
出し栓を抜き揚言して曰讀み曰く善ハ言ハく今夕  
諸君と共に天長節の前祝を奉人と終り三鞭酒を  
茶碗に其是れさる者ハ罐詰の空罐等も酌み  
天皇陛下の萬歳を三呼して之を傾く興正に酣ふ  
るとき一吏あり呼て曰今夕潮頭より高く海濱に揚陸  
せし米穀を援はるる人ハ治り將に潮水に浸されんと  
黒井声に應じて立ち武田田中も他も亦立海濱に走

一人夫を呼集り米俵を高處に運搬せし援也  
其時十二時を以て皆歸り僅に炉火を暖を取  
役する房中を臥し昨夜勞働午夜を以て今亦此の如  
く兵站部員の勞概此の如く此方因りて以て糧を千  
里の外に致し我軍の給養を全うせんとも戦ハ帝宮に銃  
砲干かき取らざるのみならず前方後方に任務を  
尽して以て初めて全休を得べき也

十一月二日晴海面鏡の如く朝寒暖計四十四度早  
起電信及郵便より廣嶋に榮多摩川丸初長  
末の黒井氏本日午後クイン浦に向け出帆并余の之

乗せし余を傳ふ

歩兵大尉田邊光正同落合兼知平壕役に熱病に  
罹り後送られて仁川病院に在り其愈むを以て多摩  
川丸に便乗し此地より來り其言に依り亦二軍と云  
事千金州に上陸ししを聞知す

多摩川丸出帆の午後を以て午前頗閑之早川  
小池西氏と共に病院地に在り流工學士中山醫學士  
も初め赤十字社諸員も別を告歩して前湾の海濱  
に在り偶砂上垣根を繞らるる内を堆を以て足す  
是先日兵卒某此地に在り田中副官自ら此地に在り



大葬して遺骨を納むる處に海水を一掬之を供して  
念佛を三唱し二氏とせし合掌を再捧して以て其英魂を  
弔き海濱往し偏平の美石あり拾つて行李に納む  
紀念として帰寓も午後或田黒井田中の諸氏と別  
小艇にて多摩川に乘り船長加納鹿之助氏と逢  
田辺光正落合兼知讀賣新聞社員藤野房次  
即日新聞社員新井由三郎等の諸氏此船中  
に在りて迎ふ皆舊知之共此船にてクイン浦に向ふ  
船未だ發せざるに二等軍医林銈次郎氏來りて曰今仁  
川より第一漁港河に赴任せし能く戦事を訓示し歸りむ

午後四時半海龍丸先汽笛を發し錦川多摩川の二  
船尋て同く汽笛を發し皆錨を擧ぐ錦川多摩川の西  
船今回初てクイン浦に向ふ海童ハ既ち數回航せしを以て  
史道守をふきまふ之乃海龍丸先き寺一錦川丸之次  
き多摩川丸又之次日漸く没し弦月天に在り山影  
を中む一八時半道守船暗沙かゝりて進まず汽笛を吹  
て後船を發言を待つる半時潮來りて船出つ後舟隨  
て駛り凡半時して道守船復歸き吹笛致し後船の如  
一此の如きも亦凡三回午前二時十五分三船共洋中  
停止して天明を俟つ蓋しクイン浦の近傍夜中入り易ら

さしを以て之海軍大抵航路ヲ熟せしむる以て多戸川錦川の  
兩船之ヲ依りて以て安全なる航行を為さんと欲して却て屢  
停止せしむる事ヲ逢ふ先日遠江丸の旺洋丸を道中や旺  
洋丸之ヲ依りて安く航行せしむるを得んや今日二船の海  
軍ヲ依りて却て屢停止の患ヲ逢へし師方撰亦一可ら  
ざる於此の如き歟

此夜室内に坐りて田中落合支氏と語り而氏曰兵の  
教育ヲ行して進歩せしハ実ニ教馬く十餘あり其例八十年  
後十八士官銃丸ヲ中しハ教人蠅集一之を介抱せしむ  
今度ハ一士官銃丸ヲ中し之を後送せしむる補助擔

架卒の外ハ之を扱ハしりて各其任務を尽して止ま  
又戦友の銃丸ヲ中りて倒れ後送せしむるハ不持せし  
弾藥を以て自己の細乱ヲ入りて進むと及傷を以て直  
く不持の繃帯小包を以て學習ししむる頃て巻く  
と八珠ヲ著しきものごと

十一月三日天明ハ海靜之鹽瀬を終る衣を以て  
甲板上に出て遠く本邦に向て恭しく我  
陛下の天長の節を祝し奉り堂に入船長及同乗  
諸氏の手を握りて賀節を祝す

暫きて船進行一嶋の近傍に到り三船共

投錨も一大汽船先立ち、此に在り筑紫丸を  
筑紫丸の傍に在りしや、是汽船駛せて本迎の一  
士官私窓より呼て曰石黒清生長官此船に  
在りやと余声に應て立ちし甲板に在りて歸祝  
を以て大谷歩兵中尉之其来り迎へしを謝し  
長子別を告げ此汽船に搭り陸に向ひ駛りし  
と凡一時半波止場を達し波止場の牡蛎殻を  
以て之を築き海中に築かんと町餘の汽船より  
下り小艇に移り波止場を達し陸に韓人或は荷  
を擔ひ或は牛を牽き雜沓を極む歩きたり町許

山腰に一片の赤十字旗を掲ぐる家あり窓戸を  
推して窺へば桑原三等軍医ありて病兵を診む  
るに俄に答を改つて曰今朝出迎せんとするに此急病  
者あり今白皮下注射を行ふ故に期に後を敢て  
罪を謝せし余曰病兵の病を療むるに余を迎へし  
より余の表の處に歩を轉て行くに半所餘千頭  
高く旭旗を掲ぐあり即兵站司令部之旗小あり  
韓人の家を假用し兵站司令官山縣也田歩兵少佐  
副官と共に炉辺に坐り致し事を辨む余を以て俄  
に立禮し曰今朝運輸の事頻報ふに故に大谷中

尉として代りて迎へし此家徳を容れし所は此  
従卒を案内せしめて長岡参謀の寓し延くと乃  
其従卒を道守入れて小徑を行くと歩一篠屋の  
寓し長岡参謀入口に掲ぐ入らば則彼尾山役の世よ  
名を知らしむ歩兵少佐長岡外史并に福原二  
兵少佐の二氏あり生を問きて在ひ迎ふ入て是を  
長岡の手を握り久瀧を談し特し尾山以来の戦功  
を祝し外史恭しく曰此功をふも全く 陛下の御  
威稜に依りのみし此正に午に近し長岡其愛病を  
此の珍味を供せし鶏肉并卵焼を以て午飯を供

も且曰本日天長節に當り午前を宴を召しとせし  
閣下の来りし中を午後し延し閣下厭はまんハ  
共し山上に於て宴を開くと是に於て連歩後山に於て  
三町天幕を張りて已に酒肴の準備あり諸氏も其に  
岩上を遊し北にあり鴨緑江の下流を眼下に尺を  
太孤山地方を中む横田砲兵大尉曰兩三日此方に向て  
火光あり時太孤山地方に目標を定めし此石上を  
て方位遠近を定めし後果して此火太孤山砲の爲  
に焼くれし之を以て全く太孤山の方位を確定す  
しを得し之を暫くして續く未集し長岡歩兵少佐

山和代田歩兵少佐林工兵少佐福原工兵少佐横田破兵  
大尉桑原三善軍医及び余の同行小池大井早川  
其他此に在る軍人軍属軍夫并に地方頭民(頭  
民は朝鮮人の五人組頭の如き者を云)雲集を其者  
ハ焼賜し干鯛蒲葦蒿の煮付之滿樽の酒を以て之を  
酌むる杯ありて浦海濱より拾集せる蛎殻を以て  
杯に代へて樽を酌み之を飲む其最初兵站司令  
官山和代田歩兵少佐美しき蛎殻を携み先此に満  
酌し恭しく東方に會し陛下に捧げ奉る者順次に之を飲  
む合一殼を手にし將に萬歳を祝せんとするに先ち長

岡少佐余に告げて曰幸に本日閣下此處に來りては  
一言の述ぶる所ありしを余に余辭を以て能く謹み述  
へて曰

諸君余は去年の今日に於てハ朝鮮平安道の極北に  
於て諸君と共に天長節を祝し奉るにハ毎に豫志  
せざる不し諸君亦或は然らば我帝國の軍隊ハ朝  
鮮を魚事して遂に鴨綠江外に新に占領地を有  
するに至りしに天皇陛下の御威後には依る  
と云わくも是も後軍諸氏の忠誠を以て非人ハ焉そ  
能く此の如きことを得人中抑

天皇陛下ハ九月十五日廣嶋ヲ本營ヲ進カサセ  
給ハリテ舊司團司令部の樓上ト玉座ヲ置クセ  
リハ其空溢其飾陋哉 陛下ハ此の如き酒溢の  
御座トテ天長節ヲ遊ハサレハ未レ曾テ有ラサリト  
信モ無レヤ我武威宇内ト輝キ赫々ト威儀ヲ四  
方ト放チ給フ所ハ此天長節ヲ遊ハサレラハ  
又未レ曾テあらせらハサリテ信ヲ故ト余ハ  
諸君ト共ト皇ト廣嶋ニ在マシ 陛下ハ天顔  
霽々ト天長節ヲ遊ハサレテ心ヲ想ヒ奉リテ  
愉快ヲ以テ共ト 陛下ハ萬歳ヲ祝奉ラシ

天皇陛下萬歳 天皇陛下萬歳 天皇陛下萬歳  
衆客齊々ト三呼ハ海山為ト歡ク祝終ル山ヲ下リ諸  
所の人夫小屋ヲ尺ハ各小屋ト旭旗ヲ掲ケ近ツキ尺ハ  
漆料ヲキテ梅干の酢ヲ用ケテ半紙ト日の丸ヲ畫ケ  
テ千里ニ及域ト我同胞ト團ヲ思フの情誰レ感慨の涙  
ホリトハキ況ヤ胸中萬斛の涙ヲ貯ル忠貞ヲ血ヲ  
拭キ復長岡少佐の宮ト入りテ於テ前余ト進人トを  
謀ル長岡少佐曰余ト茲ト小屋少佐の殘セシ馬あり  
馬ト余トテ幸トナリト諸氏ト辭シ其馬ト跨リテ  
兀山ト向テ糧食ヲ運輸スル紳人陸續群ヲ

て道路を白し抑糶金を陸送せし事奉り紳令托  
き此或ハ休メ或ハ賤り甚きハ糧を負て道に往  
不を知りし事故に本邦人丈を以て其中に混して  
之を監督せし紳人十人あり二十人ハ本邦人丈之を  
配當し之を棒入ハ鞭を以て督責せしむる事  
但通事本邦人丈二人あり運搬せし事を紳人二人  
以て容易に運搬せしむる事浦を距るを僅りし左  
右総て塩田に造拵頗る粗末なり糸造の食塩を  
製せし事其の田間の道を行く事里餘一村を  
あり村を遠く事其の三米突の保障を以て蓋

款に備ふる事為り新に築造せし事之而して款も  
る事恐る事支那にありし事我ら平垣の道を行  
く事里許一小村あり凡山是之旭族を以て至る事  
兵站支部之馬を守兵に托し以て宿に之を兵站  
支部長前田三基軍吏を以て迎へて其室に入りし  
小池大才早川と共に装束を解き室中平外に部員  
積日の勞を慰む事前田氏曰本日天長節を祝ふ事  
欲し餅を搗き部員を以て漸くキノコを以て  
之を附けし事砂糖を以て包みし事一片を以て  
陛下に捧げし事指して机上の餅を示し余元

下戸に於て其敷片を乞ふ行李中より砂糖を以て之に  
加へ其一方を前田氏に贈ふ前田氏長て曰敷十口ありて  
砂糖を味ふと將に食せんとす前田氏曰此三日前迄  
司令部の大半を引揚ぐ殊に物品十之九を此等閣  
下子供より擲飯を以てきりて得まると半截の瓢  
に飯を盛り側へ味噌漬敷片を副へ天長帝之とて  
殊に味噌汁を製り又半截の瓢に盛り茶を之を  
出さ即ち之を食ふと欲まると杖をく又著る蓋此  
処を通行する者ハ皆杖及び著る携り帯も故に余も亦  
之を携り帯もする者と思ひて出さるる之同行四人大井八若

と杖とし推乃小池ハ辨當行李に著るを推乃と  
うたふ共食ふ美支ふきも余も早川とハ頗る寒し  
炊場より杖を著るを乞ふと著る一揃にガソートル  
一個あるのみ因て之を借りガソートルの宴に蓋しを各  
分け著るハ行李中の鉛筆を以て之に代へ荷札を  
削りて杓子とす各飯を盡して食ふと飯を製  
りハ汁を盛り器あり止むを得ず汁ハ各瓢に口  
にて飲み廻しをふ余笑て曰本邦に在りて茶宴に  
招くハ濃茶を廻し飲まるとあれとす味増汁を  
廻し飲みとすとす食終り宿に入る前田氏特



僕十余日温室を焚くも終宵温暖怡も春の如  
一此家戶外に藏春閣と書き置ふ哉

昨夜彼の 陛下に捧げし餅に兵站部員の名  
刺を添へしものを帰後天覧に供せし一茶一  
行本に収む

戶外に戸あり人夫を集りて高く君を歌うて天長  
節々加むるに我も端坐を怠りて之を謹  
も蓋国歌を奏せしとありてハ祀客之を聴く禮  
も守備兵歩兵百十二隊隊の一部若干人并輜車  
輪車若干人ハ午前八時整列一廣嶋の方角に向ひて

行進しつゝ君を代を歌ひて天長節を祝せしと云此  
夜兵站支部より各兵及人夫十五を酒と餅とを給  
て加ふ事な夜せしと云。温室を焚きしを為すに室  
内終夜温うて响しを測りハ六十五度之

四日雨朝雪外六十度早起外をんハ雨兼し  
抑韓人の他の不潔を拘り其衣多しハ雪白加之  
雨衣を備せしもの稀に故に降雨の日戶外に者不  
昨日晴天兵站部に集まらるもの凡二千百人牛  
百五十頭あり今日此雨に十八時無くと云ふも未  
集まらる者僅に十餘人牛二匹のみにて韓人兵站部

於運輸事務の困難を察し、我輩の幸な地  
に於て傍々豫備敵の進む處にて荷物や豫備馬  
を込めて進むを得たり、凡山を登り馬を任せて独行し度  
原畦歩を經て田間をぬり又山原を經てゆく、里許  
俄に山嶽に達し峻坂をゆく、十餘町山嶽をゆく、  
石壁に直趨して山嶽を山嶽と曰ふ、山嶽を  
越えて出敷坂を下ると、五町人家稠密あり、市に  
了龍川府是之戸數凡七八百府廳あり寺廟あり  
宿館あり市を經て石壁を以て府に到り、  
居然堅牢あり一郭を築き、府廳寺の建築ハ皆

本邦中古の寺閣と異其式を同し、朱欄畫棟頗る  
觀多へきあり而して其時代ハ凡四五百年の間に在り  
兵站司令部と爲り伊藤少佐を主任とし副官  
曰司令官、晨に癩病に罹り、尙未、全愈せず、  
一室に在り、余前進の諸事を副官に托し、其室に  
入り戸を叩き、名を通す、ハ伊藤氏應へて而して  
戸を開き、余強て戸を開き、伊藤少佐と浴する、  
之應へて而して戸を開き、亦且哉余強て浴を續け  
し例に立ちて話さ  
更一步し轉じて病室に入り、中村三等軍医、先

道すせりて病者を巡診し病室の一部八十名を官置り  
たりと云も他ハ酒肆より侍人の家へ故立り合計病者  
四十余名負傷者十一名皆輕し長峰三等軍医後部  
三等軍医矢野三等某副官皆病し四推して病院に  
兵し巡診しりて治方を中村軍医に懇示し復兵  
站部より兵八伊藤氏病を力めて署に出入懇し日  
來の事を説く此地日に侍人二千五六百人を集り牛  
二百餘頭を衆おしりて侍人の朝來微雨今寒候に  
ともて集りて侍人千人に滿りて云伊藤氏曰閣下は  
昨日迄せりて殊に妙なりと余に故を問ふ伊藤氏曰

昨天長官より兵を以て此處に立り同役を集りて賀  
を祝し使を遣り府使を招きりりり府使官妓を伴  
ひ行列をふりて來會し此詩を送りて其詩に曰

奉賀大陣慶延

鳳曆重回瑞日明一是西國盡歡情壽杯翠泛  
南山色倦鼓音鳴鴨水声美道親疎在心上始知  
分合理中生生歌别有無窮樂運籌何憂萬里城

開國五百三年十月初六日

龍川府使 金應玉謹稿

此詩を宣せ宴後我軍を府廳に招き妓樂を張りて

之を食し、城金府使ハ頼り開化人ナリて日本語を解酒烟  
草の如き人ナリ日本産のものを用やと云余此詩篇を乞て  
帰後天覧ヲ供せん欲一行行李ヲ納む

午飯一大根と牛肉の踊は妻命を伴ふ物を用ひてを喫し午後  
司令部を發せし市を乞しと凡五町間ハ幸も岡門の石を以て  
固ク鉄扉を係上ナ朱樓あり鎮海と言ふも額を掲ぐ蓋松川  
府ハ一浦地方の海濱ナリ本外寇を防ぐの一城郭と恃る  
まふ之門ヲ添うて一言あり蓋は兵を乞く之白衣カ紳人  
中ナリあり長官の烟を吹き縦横博を乞きを乞ふ岡門を  
出て川に沿うて進むと里許後顧せしハ龍川府の北塔人を

鏡ノ石壁山嶽ナリ鏡水とて人々城壁ハ彼府都ナ他  
建築物ナシセハ七時代頼り古くして且壯大之蓋古昔句言  
唐時代唐の者ちらん広博の士を待て考證する不也一龍川  
を距り約一甲半遠ナ左方ナリ電柱の連るる是平  
壤ナリ義州ナリとの中道ニ某の地(地名今)ナリ始て城本  
道と合せし中道ハ幅凡ハ米乃至六米平坦ナリ砥石の春馬の  
車を運せし一は韓清未運せしの中道ニ城道を進むと數  
所ナリ橋を渡り橋半ナリ軍兵カ一行先進せしを乞し近づき  
呼ハ一軍軍兵ハ學士遠藤洋氏之馬上手を下し握手して  
其平安を表し彼手頼り執り顔亦頼り赤い遠藤氏平酒

を焼くも余曰余上狩例の好物を得るは奴も遠藤氏勢多  
答へて曰昨未だ熱今復熱湖一本と余歎きて馬を下り  
まふらうを論じ内行に北へ前進せし小山を越え平原に  
出くまはし小串館に連し薄着司合部と云ふ司合官は田  
歩兵少佐其木守雄氏をいゆへて曰閣下本日見せし  
事々、餘知し今從卒十人申して客殿を清かりし地客殿  
ハ数日前鳥尾中将の爲に交す木を新しせしもの後卒  
十着すりて地に玉れハ方二間下す木を敷く二窓戸あり  
寒風習くとして入る其木氏自から破れしを屏風を持  
来りし其一を基き一ハ推乃節天幕の古物を垂れし之を

